

「世界の水問題と私達の使命」

北海道 岩見沢市立上幌向中学校

三年 黒澤

萌

現在日本では、蛇口をひねれば水が出て、それを普通に飲んだり、生活用水に利用したりすることができます。私は生まれてからずっと、それが当たり前のことだと信じて疑いませんでした。しかし、こんな考えが大きく変化するような出来事がありました。

今年の二月、私の住む北海道岩見沢市とその周辺の市町村で、水道水にジクロロメタンという発がん性物質が混入してしまうという騒動が起こりました。私がそれを知ったのは混入してから約二、三日後、母が一心不乱に水道水を煮沸させているのを見た時でした。このジクロロメタンという物質は、煮沸させれば発がん性が消えるということだったので、私は初めのうち「どうせすぐ元に戻るだろう」と、あまり深く考えてはいませんでした。

その日から、煮沸させた水道水とミネラルウォーターでの生活が始まりました。その生活は、予想をはるかに上回る程不便なものでした。食器洗いにも歯磨きにもミネラルウォーターを使い、学校からは水が必要な人は水を持参するようにと連絡網が回りました。蛇口から出てくる水道水には恐怖さえ覚え、水に触りたくないと思うと同時に、今まで普通に使っていた水が使えなくなるということが、ここまで大変なことなのかと驚きを隠せませんでした。

それから数日後、私の住む地域で安全宣言が出されました。しかし、一部の市町村ではなかなか安全宣言が出されず、また少しの間不便な生活が続いていたようです。

「もう安全」と言われたからといって、水への恐怖心はそう簡単に消えるものではありませんでした。「実はまだ安全じゃないかもしれない」「もし混入してたらどうしよう」という思いばかりが募り、不安な気持ちもよりいっそう強くなってしまいました。

今、世界で衛生的な水を手に入れない人は約十億人以上いると言われてい

ます。つまり、地球の五人に一人は安全な水を飲むことができないのです。そして、不衛生な水が原因と考えられる病気のため、毎年三百万人以上の人が亡くなっています。

私は今回の体験を通して、水が使えないということがどれほど不便で辛いのか、そして発がん性物質がどれほど恐ろしいものなのか痛感させられました。そして改めて、普通に水が使えることの大切さ、自分は今まで幸せの真っ只中にいた、ということを感じるようになりました。日本のような先進国では当たり前のことだと思えます。しかし発展途上国に生きる人達にとって、安心して水を飲むことができない、食料にありつくことができない、という毎日こそが「当たり前」のことなのです。私がこの作文を書いている今も、世界中では飢餓に苦しみ、水を欲しがっている人がいると思うと、心の底から悲しさがこみ上げてきます。

日本は、食料をはじめ多くの物品を輸入に依存していますが、日本が輸入する食品の生産に必要な水の量は数億立方メートルに相当するといわれており、日本は国内だけに止まらず、世界中のすさまじい量の水を使っています。このことから考えて、世界の水問題の深刻化は私達に無関係ではありません。

水は私達が生きる上で決して欠くことのできないものです。それは人間に限らず、動物や植物など、地球上の全ての生命にとっても同じです。海では生命が誕生し、育まれてきました。川の近くでは文明が発達し、それは現代の暮らしにも大きく関わっています。そんな全生物の生命の源である水を惜しげもなく使い、世界の水問題なんてまるで他人事、という人が日本にもたくさんいるはずですが、そんな現状を見直して、世界の水問題に関心を持ち、積極的な役割を果たすことが必要だと私は思います。全ての生命が安心して暮らせる世界をつくるのが、私達の使命です。

「水は私の育ての親」

北海道 厚田村立厚田中学校
三年 小 武 真 鈴

「プールに水を入れるよ。」

そんな保育士さんの声が聞こえた。待ち望んでいたプール。みんなが外へ飛び出し、水がたまるのはまだかとプールのまわりに集まる。水がたまり、みんながプールに飛びこむ。ひんやりと冷たい水が体をつつむ。気持ちいい！

強い日差しが差しこみ、そよそよ風が吹きこむ厚田保育所。私はそこに通っていました。そこで私は、毎日のように水遊びをしていました。少しぐらい寒くても、気にしませんでした。ホースを使ったり、水と砂を混ぜてだんごを作ったり……。そして、夏の暑い日には海に行きました。毎日、毎日、びしょぬれ。どろだらけになりながら、ただただ水を相手に遊んでいました。そんな私に、母はその頃「毎日、洗濯がたいへん」と言っていました。でも、一度も「服をよごしたらダメ」と言ったことはありませんでした。

そんな保育所での思い出は、私の頭の中に今でも強く残っています。ある日、テレビで小さい子に「服をよごしちゃダメよ」と母親が言っている場面を見ました。それを見て私は不思議に思い、母にこんなことを聞きました。

「保育所では、なんであんなに水遊びをさせるの？」
その保育所で働いている母は、私にこう話してくれました。

「水で遊ぶと絵がのびのびするんだよ。だから、たくさん水遊びをさせるんだよ。」

その話を聞いた時、私は水とふれあうことは子供にとって、とても良いことなのだと思います。

しかし、水で遊ぶことと、絵がのびのびすることの関係がよくわからなかった私は、母から保育士に関する本を借りて読んでみました。すると、こんなことがわかりました。水は可塑性が高いので、いろいろな変化を見ることが出来る。それによってイメージが豊かになるということでした。また、皮膚からの水刺激に

よって健康に育つということも書いてありました。そのせいかはわかりませんが、私はいつも元気でカゼなどは、あまりひきませんでした。それは、今でも変わりません。水で遊ぶことは、絵だけでなく、すべての面においてとても大切なことなのだ。そして、私が今こうして生きているのは水のおかげなのだ実感しました。

しかし、そんな私たちとは対照的な世界がこの世界には数多くあるということを知りました。遊ぶための水はおろか、満足に水も飲めない世界があるので。遊ぶ時間もありません。水をくむために一日の大半をかけて川まで歩かなければならないからです。学校にも行けません。さらに驚くことは、世界では水が原因で八秒に一人死んでいるそうです。私はそんな現実を知って、今こうして自分が健康で楽しい生活を送っているのはすべて水のおかげなのだ強く感じるとともに、その水に恵まれない世界を何とかしなければという気持ちでいっぱいになりました。

日本は、水に恵まれていて水を飲めず苦しむ人はいないはずですが、それは日本を含め限られた国だけで、世界中すべてがそういうわけではないのです。

私は、いつでもほしい時に水が飲め、たくさん水で遊んできました。そして、水の音を聞き、姿を楽しみ、においを嗅ぎ、味わい、ふれることにより、豊かな感覚を手に入れました。水の豊かなこの日本で育った私たちは、ただ飲むということだけでなく、水に育ててもらっているのです。水は私の育ての親でもあるのです。その育ての親への感謝を忘れず、その恩返しとして、水に恵まれない世界のこと。水問題で苦しんでいる人々のことを考えていかなければと思っています。

「水は生活の命」

岩手県 軽米町立小軽米中学校
二年 山田 明美

「ペットボトルに水ためとけよ。」
七月の終わりになると、きまって母はこう言います。

私の家は、洗たく、掃除などに山の井戸水を使っています。しかし、その井戸水は私の家だけで使っているわけではありません。私の家とその近所の四軒で共同で使っているのです。毎年夏になると雨があまり降らなくなります。すると、山の井戸の水がなくなってしまうので、共同で井戸水を使う私の家とその四軒には、井戸水の夏のルールがあります。それは、夏は水が足りなくなるので、決められた時間の朝八時になると、井戸水を管理している家の人が水を止めるというルールです。ですから朝八時以降は私達は井戸水を使うことができません。あまりの水不足になると夜の八時にも水が止まる場合があります。夏のこのルールは私達の生活にさまざまな影響を与えます。

特に炊事、洗たく、掃除、お風呂といった生活をする上で欠かせないこの四つのことを行うことは、この夏の時期の私達の家では、とても困難なことです。母はいつも水が止まると、

「あ。水が出ない。水が止まった。」

と怒ったような声を出します。この言葉を聞くと、私はドツと体が重くなるように感じます。「また、水が使えないのか。」という思いは、言葉では言いつくせない大きな不安となって私達家族に重くのしかかってくるのです。

母は、水が止まることによって、大変な苦勞をしています。水が止まる前の朝早くに起きて、洗たく、炊事などの家事をすべて短時間で終わらせるのです。そんな母の姿を見ていると、水が出ないことがどれほど私達に大変な苦勞を与えるのかということをつくづく感じさせられます。

また一番水を使う夜にも、水が止まる時がありました。ご飯の準備の時は、少しづつ流れる水をためて使わなくてはなりません。普段なら四十分から五十分で

終わる洗たくも水をためるのに一時間以上もかかる時があります。お風呂に至っては、必ず一時間以上も水を出し続けないと水がたまりません。そのため、何をすることもかなりの時間がかかるのです。

また、六年前の十月二十八日におきた軽米町の大雨による大洪水には、水の大切さと共に、水の恐さも教えられました。そのうえ、その大雨の影響で井戸から水が流れなくなり、水が長い間使えなくなってしまい、とても大変でした。私の家は浸水の被害にあって床も何もかもドロだらけになりましたが、水が出ないので掃除ができません。もちろん炊事も洗たくもできないので、兄と姉と私の兄弟三人は祖父の家で暮らす事になりました。父と母は家に残り復旧作業をしました。水が出ないので大変だったそうです。水を使うために近所の人達が協力して井戸を直してくれましたが水を全く使えないということは、イコール生活ができないということ、あの時ほど思い知らされたことはありません。日ごろから水の大切さを感じて、もともと大事に水を使えばいいのに、どうして私達は、失ったり使えなくなつて初めてそのもの大切さに気付くのでしょうか。そして、便利になればなるほどかつて味わった苦勞を忘れ、ものを無駄に使ってしまうのです。

今の日本の生活は、かつてに比べとても便利になりました。テレビのコマーシャルを見ても快適な生活スタイルが提案され、スイッチ一つで炊事や洗たく等が可能です。しかし、その便利さの一方で、大切な資源である水が生活を支えるかけがえのないものである、という事実を私達は忘れてはならないと思います。水がなくては私達の生活は成り立ちません。水は私達にとって生活の源であり命なのです。

「湖の村」に生まれて思ったこと」

秋田県 大潟村立大潟中学校
二年 宮川 紀元

僕たちの住んでいる「大潟村」は、四十数年前、日本第二の湖「八郎潟」の干拓事業によって誕生した。戦後間もない日本の食糧源を担う「モデル農村」それが、この村の出発だった。

村は、湖で囲まれている。干拓の時、農業に必要な水を確保するため、周囲の水を残したからだ。二十年ほど前からは、水道水にも使われている。今、この八郎潟残存湖に、大きな変化が現れている。

昔から、それほどきれいではなかったが、現在はさらに汚れが増し、日本の汚染された湖ワーストファイブに入っているのだ。

元々の原因は、農業用水だから仕方ない部分もある。大規模経営をする農家にとって、化学肥料や農薬は必要不可欠だからである。だが、これが影響し、汚れたところに強いブラックバスなどの「外来魚」が増えている。これがさらに連鎖を起す。全国からバス釣りに来た人たちが捨てるゴミや撒き餌が、汚れにさらなる追い打ちをかけているのだ。

僕はそもそも、一人一人が気をつけるべきだと思う。そう言えば大人たちが、湖のまわりにも当然かのようにゴミを捨てるのを目にすることがある。これを真似して、小さな子供まで同じ事をする。こうしているうちに、次の世代、また次の世代と続いていってしまうのではないだろうか。

もちろん村では「村と湖をきれいにする」意識の高まりもある。年に数回、村民たちが朝早く起きて取り組むクリーンアップ活動。また、村内にたったひとつのスーパーのビニールバッグには、ずっと前からこんな事が書かれている。「みんなが拾い みんなが捨てない クリーン作戦の村 有害と知って使うな合成洗剤」。マナーを守るように呼びかけ、みんなが意識すれば、だいぶ違ってくると思うのだ。

農業だって同じである。最近耳にする有機農業。村でも真剣に取り組んでいる

方々がいると聞く。これが広まれば格段に湖はきれいになる。

僕は、大潟村の水が好きだ。湖の水を浄化している、単なる水道水であっても、夏の暑い時期、汗かいて動き回ったあと、疲れた体に流し込む冷たい水は何とも言えないくらいうまい。別に有名な水でもない、ただの大潟村の水道の水。しかし、それが純粹に好きだ。それだけに、水が汚れていくのは防ぎたい。

まわりの人たちは、「別に水くらい……。」と違って、普通に水の無駄遣いをする。水道を全開にするだけの、わけのわからない遊びをしている人さえいる。僕には、この人たちの気持ちが分からない。大切な水を、別に何をするわけでもないのに流すのは、どうだろうか。世界には、「水がほしい」と思う人がたくさんいる。そんな人たちが、このような光景を目にしたら、どう思うだろうか。怒り、同時に言いようもなく悲しむだろう。

僕たちは、周りを水に囲まれているところにいることで、水を当たり前のようにならぬ。考えすぎているのではないか。僕は、これは間違っていると思う。逆に、こんな場所に住んでいるからこそ、水の大切さ、また汚染問題を他の地域に伝えなければならぬ。他の地域から村を訪れる人も同じだ。同じ地球の一部なのだから、他人ごとと思わずに協力していかなければならないはずだ。目を背けることなく、無関心にならないで、みんなが一丸となってこの問題に取り組まなければならない。

たくさんあるとはいえ、「たかが水、されど水」である。僕は村の人や友達ともう一度考えてみたい。水こそが、この地球上のすべてを生み出す、特別な資源なのだから。

「水は地球の宝物」

福島県 郡山市立緑ヶ丘中学校
三年 増子 恵美

水。それは私達の生活に欠かすことができないもの。地球は、宇宙の中で唯一、水が存在する惑星である。もし水がなくなってしまうたら、この地球上の生物は全て、死滅してしまっだろう。そのような貴重な水を、私達は大切に扱っているのだろうか。

私の母の実家では、まだ井戸水を飲料水として使用している。その水は、いつでも冷たく、無臭で甘いような味がして、ゴクゴク飲んでしまう。

「おじいちゃん家の水っておいしいね。」
というと、

「恵美ちゃん家の水は、浄水場で作ったカルキが入っている水だから、そう思うのかな。これが自然の水なんだよ。」

と話してくれた。そして祖父は、滝根町にはもつとすごい水がある事を、教えてくれた。

アルカリ天然水という水で、その水は世界で最も権威ある国際食品品評会（モンド・セレクション）で大金賞を取った水である。

滝根町には、二つの大きな鍾乳洞がある。入水鍾乳洞とあぶくま洞で、福島県の観光地として大変有名な場所だ。その一つの、入水鍾乳洞の近くの工場で、作られていると聞き、どんなすごい水なのか興味を湧いてきたので、早速祖父に頼んで、詳しい話を聞きに行くことにした。

あぶくまの天然水は、カルシウムやミネラルをバランス良く含み、滝根町の豊かな自然が生んだ体にやさしい水。白い石灰石のカルスト台地から湧き出る天然水。あぶくま洞や入水鍾乳洞を育てた滝根町の大地の石灰岩層を長い年月をかけ、浸透してきた「源水」だ。

こんな素晴らしい水が、こんな近くにある事に大変驚いた。だから、祖父の家の水がおいしいのだと確信した。しかし、最近はこの水の環境が変化していると祖父は心配していた。

近年、生活排水や農薬の散布などにより、以前は生息していた沢がにや、清流にいる魚がほとんどいなくなってしまう事。たくさんいたどじょうでさえ、あまり見かけない事、清水が枯れてしまった事。人間の生活を最優先する事で、少しずつ自然が傷つき、いつの間にか以前の姿がなくなっていく事が悲しいけれど時代の流れなのかなあと、あきらめている様子で祖父は語ってくれた。

地球環境の変化・生活様式の変化により、自然環境を少しずつ破壊しているのが、祖父の話聞いてよくわかった。近所の畜産農家が牛の尿を川に流している話は、あまりにも身勝手な行動すぎてがっかりした。一部の人間がいくら頑張っても、環境を守るうが、という意識が全ての人につながっていかなくては、意味がなくなってしまうと強く感じた。

春には田んぼに多くのれんげの花が咲き、とてもきれいだった事。夏にはきれいな川で泳いだ事。そして、夜にはホタルの灯りが、そこかしこにたくさん見られた事。秋には、赤とんぼやたくさんさんのトンボが飛んでいた事。これが祖父の幼少頃の風景だ。そのホタルやトンボの卵はみんな、きれいな水で産まれ育つのだ。そんな風景を私も見てみたかったと思う。もう私達は見られないのだろうか。もし、その風景を取り戻す事ができるのなら、私は一生懸命お手伝いしたいと思う。

自然の力で何千年もの時間をかけて作られた、鍾乳洞やその水。それを、私達の時代になくす事がないようにしなくてはならないし、それを次世代に受けつぐ使命が、私達にはあると思う。

水は地球の宝物。私達の命の源である。その水に感謝をし、一人一人がもつと意識をもって、水の大切さを考えなければならぬ。私達の行動により、昔の美しい自然をよみがえらせる事ができるはずだ。人間と生物の共生には、きれいな水が重要な鍵である事に間違いない。地球の作る水がおいしい事を多くの人に知ってもらいたいと思う。

「水」と生きる」

栃木県 作新学院中部
二年 林 田 翔

「なんてうれしそうなんだろう。」

僕はそのニュースを見て、驚きとともに、とても温かい気持ちになりました。そのテレビの画面では、新潟中越地震により被災し、避難所で生活している赤ちゃんが、一週間ぶりにお風呂に入る様子が報じられていました。その時の赤ちゃんとその様子を見ていたお母さんのとてもうれしそうなお表情は今でも忘れられません。この時、被災地の人々が生きるために一番必要としているのは「水」なのだと思われ、人間の生命の根源は「水」なのだ、僕の心に深く刻みこまれました。

その時に、僕は初めて水の大切さを実感したのです。それまでの僕は、毎日温かいお風呂に入れて、水道のきれいな水を好きなだけ自由に使うことができました、それが当然だと思っていました。でも、僕が健康的で衛生的な生活を営むことができるのは、豊富できれいな水のおかげであり、それがとても幸せなことだと、赤ちゃんの笑顔に教えられたのです。

しかし、僕達に幸せをもたらす水は、時としてとても恐ろしい災害も引き起こします。昨年十二月のスマトラ沖大地震によって発生したインド洋大津波は、僕達の身長の数倍もある高さの巨大な水の壁となって東南アジア諸国を襲い、多くの人命を一瞬にして飲みこみました。僕はこの災害をニュースで見た時、

「水はなんて恐ろしいのだろう。」

と思い、水に対する感謝の気持ちを決して失いかねました。津波による被災地の様子が中継されるたびに、本当に悲惨な状況を目のあたりにし、水が汚濁され、救済物資の水が届かず、水不足のために泥水を飲んで病気になるってしまった子ども達の姿が映し出された時、かわいそうで、何もしてあげられない自分の無力さに心が痛みました。僕達が、水道の蛇口を開けるだけで使えるきれいな水をわけてあげることができたらいいのにと。

ここで、今、僕達がきれいな水をいつでも自由に使うことができるのは、先人の苦労と努力の長く険しい道のりがあったことを忘れてはいけません。僕は、小学四年生の時に那須野が原に社会科見学に行ったことを思い出して、調べてみました。すると、水と緑に囲まれた自然豊かな印象を受けた那須野が原も、昔は荒地で、矢板武さんと印南丈作さんの二人が中心となり、十五年間の尽力と苦労があつて那須疎水が完成したことがわかりました。また、資料を読み進めていくうちに、スコップやモッコなどの簡単な道具しかない時代に、人の手によって十六キロメートルもの水路工事をした、先人の言葉には表せないほどの苦労を知り、胸が熱くなりました。そして、当時工事にたずさわった多くの人々の汗の結晶であるこの水路は、今も那須野が原の人々の生活と、水と緑の豊かな雄大な大地を支えています。きれいな水を使うことができる今日の僕達の幸せな生活は、このような先人の苦労と努力により成り立っているということを決して忘れてはいけません。

今まで、ある事が当然で、何も考えずに使っていた水が、僕達が生きていくためにどれほど大切であり、ありがたいものかを実感しました。これからは、日常生活上つねに水に感謝して、節水を心がけるよう自分に強く言い聞かせました。世の中には無駄にしている水などどこにもないのですから。

雨や雪は大地にもどり、地下水となり、また水蒸気として大気中にもどってきます。水は自然界の中に絶えず存在し、僕達の生活用水を供給してくれるのです。でも、水は決して無限ではないのです。きれいな水がいつも自由に使える僕達は、それだけでとても幸せです。人間の生命の根源である水をつねに大切に、水に対する感謝の気持ちを忘れることなく、水といっしょに生きていきたいと思っています。

「水を使える幸せに気付いて」

群馬県 群馬大学教育学部附属中学校
三年 石内 崇 勝

僕の住む前橋市は、利根川の流域に位置している。市内には六つもの大きな橋がかかり大きな渋滞もなく車がスムーズに流れる一助を成している。当たり前の様に毎日僕はそれらの橋を渡り通学している。利根川は故郷前橋の風景としてなくてはならない存在だ。だが、その川の上を渡る時、気付いて見れば一度もその流れを成す川の水に「有難いな。」という思いを持った事はなかった。

大雨や台風のと、茶色にごった水が、水位を増し、うねりを上げて流れるのを見る時は、かつてあばれ川として名をとどろかせた「坂東太郎」の一面をかい間見る気がする。その時、自然の力の恐ろしさ、水の力の破壊力を実感する事はしばしばだが、それは感謝の念ではなく、「恐れ」である。

頭の中では、利根川の水のおかげで僕達が生活する上で不自由なく水を利用してきている事はわかっている。では、なぜ僕は心から感謝できないのだろう。僕達が利用しているものが川の水ではなく水道水だからだろうか？いや、僕は水道から出る水にさえ感謝した事はなかった様に思う。電気にしる、ガスにしる毎日の生活に当たり前に存在している物こそが、自分達の生活をささえてくれているという事実に、あまりに無頓着すぎたのだ。

十年前の阪神淡路大震災の時の事を色々な本で読んで、ライフラインと呼ばれる、水・電気・ガスの大切さを知った。しかし、実感はしていなかった。映像として、はっきり記憶していないからだと思う。それが昨年の新潟中越地震を生中継で毎日の様に見聞きし、本当に水の有難さを思い知らされた思いがした。

当初ペットボトルが配られたが、全く足らず飲用にも事欠いていた。しかし、さらに驚いたのは、何と水が必要な事は多いのだろうかという事だ。

今はトイレ一つ取っても水洗だし、洗濯をするにも、風呂に入るのにも水が必要だ。患者さんの治療をするにも、汚れた傷を洗うのにも清潔な水が必要なの

だ。こんなにも大変な事が起こらないと、その事に気付かなかったなんて、何と幸せな暮らしをしていたのかと思う。そして、水源としての川や地下水が必要な事はもちろんだが、そのままでは生活に利用できないどころか、脅威に変貌しかねない事を改めて感じた。水道の普及の為に多くの職員の方々が、誰から「有難う」を言われる事なく、もくもくと昼夜にわたり作業をして下さったおかげで、水道の蛇口をひねれば水が出る様になったのだ。改めてそういった人々の苦勞に頭の下がる思いがする。

日本国内では、こういった災害時にしか水の有難みを感じないほど恵まれた生活を営んでいる僕たち。その同じ時代を生きる世界各国に目を向けた時、その有難さがなお強調される。日本は世界有数の長寿国だが、その多くが小児死亡率の低さに関係していると言われている。フィリピンのスラム街や、インド、パキスタン、エチオピア、アフリカの多くの国々でも長寿の人々は居る。だが圧倒的な小児死亡率の高さにより、平均寿命が低くなっているのだ。その原因の多くは、無知と不衛生。清潔な水さえあれば救うことができる沢山の小さな命がそこにあるのだ。

自然の恵みである尊い水と、それを僕たちのもとに安全に衛生的に届けてくれる人々の見えない努力に、これからは感謝の念を持つとうと思う。そして、今まで浴びる様に使っていた風呂の湯も少し節水しようと思う。そんな気持ちを持って、明日橋を渡る時、利根川の流れが少し違って僕の心に映る気がする。

「我が家の節水」

千葉県 白浜町立白浜中学校
三年 佐野 あずさ

「本気で節水しなくちゃー！」
昨年到现在も水の作文を書くことになり、ネタに詰まって母に相談した時のことである。母はここ四、五年の水道使用量の検針票を調べていて、突然こう言ったのだ。

母は、私にもよくわかるように、毎月の水道使用量を簡単な表にしてくれた。その表を見て気がついたことが二つある。

ひとつは、私の家では一年のうち最も水を多く使うのが七月から九月の暑い時期だということ。汗をかくのでお風呂やシャワーなしではられない。洗濯物もたくさん出る。まさかこの時期、汗くさいのをじっとがまんしてお風呂や洗濯をひかえるというわけにもいかないの、節水はかなりむずかしいのではないかと思う。

もうひとつは、一年ぐらい前から全体的に使用量が増えているということだ。どうしてだろう。私の神経質な手の洗い方が原因だろうか。それとも、髪の毛を洗う時、シャワーをずっと出しっぱなしで洗うからだろうか。

私は去年、水の作文を書いた時に、町の水道ができる前はバケツ一杯の水を手に入れるのに大変な労力と時間を使ったことを知って水を大切に使うと心に決めたはずなのに、一年もたないうちに気にもとめなくなってしまうている自分を情けなく思った。毎日毎日いつでも節水を意識し続け、実際に行動するのはすごくむずかしい。

私は一日のうちいろいろな場面で水を使っている。歯磨き、洗顔、トイレ、手洗い、掃除、炊事、洗濯、お風呂。ちよつと気をつけたぐらいで使う水の量がそんなに変わるのだろうか。ほんの少しのちがいがいしかなければ、気がすむようにやってもいいんじゃないか。そんな気持ちもわいてくる。だいたい、家族は節水なんて意識しているのだろうか。

私は、父に節水について日ごろ気をつけていることを聞いてみた。父はしばらく考えて

「特に何もしていないよ。しいて言えば、水を飲む時はコップを使って飲むようにしていることぐらいかな。」

と言った。私や兄は水を出しっぱなしにして手ですくって飲む。あまり節水してないと父だが、妙に説得力があつて納得するしかなかった。母に言わせると、我が家で一番水を使う量が少ないのは父なのだそう。特に意識しなくても節水できてしまう人なのかもしれない。すごい。

次に、兄に聞いてみた。私より神経質な兄は、水の大量消費者だ。きつと何もしていない。そう思って聞くと、

「あまり変わったことはしていないけど、前より水を使う回数を減らした。」
と言う。何もしていないようでもちゃんと考えて実行しているんだと感心した。

節水を気にかけていないと思った父も兄もそれなりに気をつけているのに、最近になって使用量が増えたのはやはり私が原因だろうか。気になって母にそう言ったら、

「ああ、それ？きつと私が洗濯をやるようになったからじゃないかな。」
と言う。

祖母は、汚れ物が全部出そろった翌日の朝洗濯をしていた。年をとって無理がきかなくなつたので母がやるようになったのだが、母は仕事に出るので洗濯は夜のうちにやっつてしまわなければならない。

「汚れ物が出そろうのを待っていると洗濯が終わらなくなるんで見切り発車で始めるからね。洗う回数が増えちゃうんだよ。」

見つけた、大きな節水ができるところ。遠距離通勤の父はしかたがないとして、せめて私や兄だけでも勝手をせず早めにお風呂に入るようにすれば、洗濯の回数が減って母も楽になるのだ。毎日ずっと節水を意識し続けるのはむずかしいけれど、努力しなければ何も始まらない。がんばろう。

「断水で学んだ水の大切さ」

神奈川県 小田原市立城山中学校
二年 鈴木 亜里沙

学級連絡網で断水による休校が伝えられたとき「えっ！断水ぐらいで学校が休校になるの？」と驚いてしまいました。私が今まで経験した断水は、工事などで何時から何時までと予告のあるものだったので、多少不便を感じる程度でした。しかし今回は、もっと深刻な事でした。

私の住んでいる小田原では、四月に水道管破損事故が起こり、五日間にわたり、市内の約七千世帯が断水になりました。私の場合、学校は断水地域にありましたが、自宅は水が出る地域でした。でもクラスの友だちの中には家も断水で、とてもたいへんな思いをした人が何人もいました。お弁当はコンビニ弁当を持っていき、食事は紙コップや割りばしを使い、洗いものはペットボトルに入れた水を必要最低限に工夫して洗い、トイレは一回一回、タンクに水を入れて使ったそうです。

中学校は、トイレや給食の問題で一日、休校になりましたが、一日かけてタンクに水を貯め、お弁当・水筒持参で翌日から授業が再開されました。それでも「西トイレのタンクの水が減少してきたので、東トイレを使うようにしてください。」と校内放送があると、皆、不安になり、限りある水を大切に使っていました。

また、私たちの中学は給水所になったので朝早くから市の職員の方たちが来て、給水の準備が進められました。昼休みになると何人かの生徒が水運びを手伝い始めたので、私も参加しました。水はリットルずつビニール袋に入っていて、袋には秦野、川崎、横浜、横須賀など、市の名前が書かれていました。係の人に「秦野を五個！」と言われたらそれを五袋とって、取りに来た人の車のトランクに入れる仕事です。水を取りに来る人は歩きや自転車の人も多く、中には一回に一袋ずつ持って帰り十往復したという、お年寄りもいて、坂の多い地域なのでさぞかし大変だったろうと思ひ、とても気の毒になりました。

しかし水が欲しくても、お年寄りだけの世帯で取りに行くことさえできないという家もあり、近所の家同士が協力して助け合う姿もみうけられました。

私の祖父が入院していた病院も断水地域にあり、盛んに節水を呼びかけていたのですが貯めてあったタンクの水が底をつき、楽しみにしていた、お風呂に入ってもらえず、体をふいてもらったただだったと祖父は少し残念そうでした。

街中では「災害応援」というタスキをかけたタンクローリー車が何台も走り、市の広報車は給水場所と時間をひんばんにアナウンスしていました。テレビのニュースや新聞でも小田原の断水が報じられ、たいへんな事態になっていることが私にもよくわかりました。

今回の断水は、復旧作業に時間がかかったことや、市民にとって欲しい情報が得られなかったことで断水地域では、不安な日々を送りました。

今回の断水で「水」が私たちの生活に欠かせない大切なものだということに改めて認識しました。学校でも、皆、以前より水道をこまめに止めて、うがいや手洗いをするようになりました。

五日間にわたる断水は不便でしたが、普段あるのがあたりまえのように感じていた水を、大切に使うきっかけとなったらいなと思ひました。

「きれいな水をいつまでも」

富山県 氷見市立南部中学校
三年 宇 波 由里菜

私の家の前には湊川が流れている。流れているといっても河口までわずかの場所であるため、海水と淡水が混ざり合いほとんど水流がない。しかし、川の中ほどに噴水を作り、両側の歩道には桜並木、河川敷は石畳にして散策を楽しめるようになっていく。春の桜の季節はもちろん、冬はイルミネーションが飾られ、氷見の観光スポットの一つとして自慢できる景観だ。

父が子供の頃の湊川は草の生えた土手で、町中を流れ終えたこの辺りの水は生活排水でかなり汚れ、時々どぶ臭いことがあったそう。そんな川でも父はボラやハゼ、ウグイなどを釣って遊んだらしい。

この川が現在のように美しく整備されてどれくらい経ったのだろうか。噴水は川の水をくみ上げる方式なので滞っていた流れを攪拌することで水流がおき、水が元気になっていくといわれている。現に川には、昔より多くの魚の姿が見られるようになったと祖母は言っていた。また、下水道設備の改善も湊川の水がきれいになった要因の一つだと思う。

しかし、私は気になることがある。それは、川側に面した桜の枝がどんどん枯れていることだ。最初私は川の水が汚れてきているからだと思っていた。噴水によって飛ばされた水が枝にかかり枯れているのは明らかだからだ。歩道に置かれたプランターの花も元気がない。しかし、それは水の汚れではなく、川の水そのものにあることに気がついた。原因は海水だ。川の水に混じる海水がしづきとまって、風下にある桜の木にかかるからである。流れの悪い川の水を活性化させ、眺めも楽しめる画期的アイディアだと思った噴水。人も魚も喜んでくれるはずだろう。でも、植物にとって歓迎できるものではなかったのだ。部屋の窓から桜と噴水を見て、複雑な気持ちになった。

また、こんなこともある。大雨になると、川の水があふれて洪水がおこり、住

宅に被害がでる。土砂くずれもおこる。地震によって津波が発生すると、たくさん人の命が水によって奪われてしまうだろう。しかし、雨が一つも降らなければ、農作物が被害を受ける。つまり、水は時と場合、ものによっても必要とされる時と、必要ではなくなる時があるのである。

富山県の水は全国的にみてもすごくおいしいと言える。でも、東京の水はおいしいとは言えないらしい。今度、修学旅行で行く大阪でも生水を飲んではいけなさと聞いた。では、なぜおいしい水とそうでない水があるのだろうか。富山県と都会の違いはいろいろある。その中できれいな自然を残していくこと。これがきれいな水を守ることに繋がっていくのだと思う。

人間は自然を破壊しつづけている。このことが今、世界規模の問題になっている。この問題について多くの人が頭を抱えているように、地球上の命あるものすべてはうまく共存していかなければならないと思う。人にとっても、その他の生き物にとっても、水が必要ではない時がまれにあるだろう。けれども、人間が自然を守り、それが水を守るようになっていく。そして、すべての生き物がうまく共に暮らしていけるのだと思う。

水について考えてみると、生活をしていくうえで欠くことのできない重要なものであり、水がなければ生きていけないことに誰もが気がつくと思う。その水には限りがあるが、水道の蛇口をひねれば水がでてくる。これが当たり前になっていることは否定できない。しかし、水が大切であることを忘れてしまいうらい困ることなく生活できるのは、すごく幸せなことだと思う。だから、清潔でおいしい水がいつでも飲めることに感謝できるようにしたい。そして、ずっとそれが続くように自然を大切に、未来にきれいな自然をより多く残せるようにがんばろうと思う。

「大切な水。」

山梨県 駿台甲府中学校
二年 梶村 光貴

もし水がなかったら——。
僕は毎日の生活の中で、当たり前のように水を使っている。食事・トイレ・お風呂・洗濯……。僕達の日々の生活には水が必要不可欠である。とても重要なものであるにもかかわらず、あつて当然と思つている僕達は、大切に使つていない。

先日僕は、長野県にある梓川あづまの奈川ながわ渡ダム・安曇発電所を見学した。そこでは、流れ落ちる水の力でタービンを回転させ電気を起こす、いわゆる水力発電が行われていた。自然の力を利用して、二酸化炭素を排出しない発電方式で、資源の少ない日本のエネルギーとして活躍している。水力発電のメリットは、運転コストが安くてすむことだ。そのことから、次第に日本の発電方式の主流となった。しかし、昭和三十年から四十年にかけて急増する電力需要をまかなうため、水力発電所より建設にかかる費用が安く、出力規模の大きい火力発電所が次々に建設された。

発電の主体は火力発電に移ったが、水力発電は一日のピークをまかなうという、大変重要な役割を担っている。電気の需要は昼と夜とで大きく差がある。このため、昼夜を通して使われる部分は、大型の火力発電所や原子力発電所が担当し、昼間の变化する部分は、貯水池や調整池を持つ水力発電所が加わる。こうすることで、各発電所の特性を活かした効率的な発電を可能にしており、水力発電は運転・停止がしやすいといった特長を利用している。

水と同様、電気も僕達の生活になくはならない存在となっている。その電気を作り出すのも水なのだ。そして水は、農業や工業など、たくさんの場面で活躍している。現に、発電に使われた梓川の水は、「中信平農業水利事業」として、松本平二市三町四村一、〇〇〇hハクタールの豊かな田畑を潤す農業用水として地域の生

活や経済に役立っている。今回、僕はダムや水力発電の仕組み・働きを詳しく知ることができて本当に良かったと思う。今まで何気なく使つていた水を、少し意識して使うようになった。

なぜ人間は無駄使いをしてしまうのだろうか。シャワーの出しっぱなし、食器洗いの時の水道の出しっぱなし……。日常生活のありとあらゆる場面で僕達は無駄使いをしている。それは水に限らず、石油、石炭、鉄鋼などの天然資源にもいえることだ。少し視野を広げて考えてみると、僕達日本人は、世界中の人々と比較しても、水を使い過ぎだと思ふ。世界では、日本のようにきれいな水が多くなく、水不足に悩まされている国も多くある。そのような国では、飲む水さえもろくになく、水がないために食糧の生産もままならない。そのせいで、餓死してしまふ人が後を絶たない。以前、テレビで牛井を一杯作るのに必要な水の量は、牛の育成なども含めて一トンであるということを知った。それは僕にとって大きな衝撃だった。牛井一杯を我慢すれば、一トンもの水を節約できることがわかったからだ。

このように、日々の生活の中には、資源の節約の鍵がたくさん潜んでいる。それに気が付き、皆で節約することが重要なのだ。一人ひとりの小さな行動が、だんだん大きくなり、世界の水不足の解消に一歩近づぐことになる。

もしこの世の中に水がなかったら——。僕は生きていけない。水は、あらゆる生物の源だ。こんな大切な水に感謝して、僕は生きていかなければならないと思ふ。そして、その水が無駄に使わないためにも、自分自身の生活スタイルを見直し、ほんの小さなことでも、僕から行動を起こしていきたい。

「水の循環について」

山梨県 駿台甲府中学校
二年 河西 真瑠那

まず、水を考えるには、水循環のしくみを知る事だと思います。水は地球のその地域の様々な情報を運んでくるのです。つまり、水は森や土、自然の状況の変化を知る情報源ともいえるのです。

山地に降り注いだ雨は、地中に染み込み地下水となり、湧き水や泉となり地表に現われます。これが川の始まりです。水は、この循環により自然の力で浄化されていくのです。

私に川がこの事を教えてくれる場所があります。南アルプスの前衛といわれる戸川溪谷です。富士川に注ぐこの川は、家から車で十五分程、標高八〇〇メートルのところには、落差二〇メートルの滝があります。山梨には豊かな自然を残した川はたくさんありますが小さい頃川で遊び、川の流れを感じることで、川を知ることができるとおもいます。

毎年一番暑い夏の日には、家族で過ごすこの川。冷たい水は素足に心地良く、季節の様な姿を見せてくれます。水の量により、二メートルもある岩が顔を出したり、川の流れる音が変わったり、自然の怖ささえ感じる時もあります。川に直接触れることで大自然について考えることができます。

私の町は、自然に恵まれた地域であり、工場排水の汚染もなく、一見きれいな町に見えます。しかし、川にゴミが増え、昔に比べ、川に住む魚や生き物が住みにくい環境となってきました。

今、都市は森林と川の生態系を手本として水循環のしくみをつくりかえていくようにしています。多くの地域で水の循環を助ける水田の役割を見直し、できるだけ多く残そうとしたり、コンクリートの水路に代わり自然の植物を植える事で、自然の浄化作用を利用したり。機能性も考え、水や川がある町づくりをデザインしているところもあります。

私達の命の水を守るために、昔から多くの人々が改善改良してきたことを忘れてはいけないと思います。洪水から人々を守るために、先人はダムや堤防をつくったり、河川の改修をおこなって工夫をしてきました。最近では、雨の染み込まなかつた舗装を透水性舗装にしたり地下調節池や遊水地をつくったり、水を地中に戻す工夫もされています。

私達は、昔から水が大切であり、また多くの災害から人々を守ってきた設備や人々の戦いを忘れてはいけないのです。

今は、水道から簡単に水が出てきます。また、浄水器を利用したり、輸入の水により、安全でおいしい水はいつでも手に入ることが出来ます。

しかし、自然の浄化能力には限界があります。ゴミや生活排水、工場排水、農薬、化学肥料など、ダイオキシン等の様々な環境ホルモンにより成長できなくなった水の中の生き物達。これらは、私達の健康をおびやかす結果になるのです。

私達は、町や国の多くの人に目を向け、一人一人がどんな役割を果たすべきか考えなくてはならないのです。

今、家庭で出している二〇〇リットルの排水をできるだけ汚さないようにすると、汚濁物質のBODを二〇〇パーセント削減できるそうです。そして、忘れてはいけない事は地球上の六〇億人のうち、途上国の約一〇億人が清潔な飲料水を飲めずに、一秒の間に三人もの命が奪われているといわれていることです。

私達にできる事は、生活で汚れた水を流さずに再利用する。台所の食器を洗剤を少なくする。など色々な事が身近にたくさんあります。一つでも、生活の中で実践していきこの町が自然の水循環を維持できるよう、協力していきたいです。